

『竹取物語』登場人物「性格論」

—五人の貴公子を中心に—

井上英明*

序

本誌掲載前二稿^(注1)において、『竹取物語』に生起する事件がどのように時間的に配列され、かつそうした事件の語柄が日本古代文芸における先行作品や、唐土を中心とする外国文学からの甚大な影響下に成立したにもかかわらず、『竹取物語』が、あの『源氏物語』の「絵合」の巻でなぜ「物語の出で来はじめの祖」といわれたのか、その理由の一つとしてこの物語が、それ以前の『記』・『紀』・『風土記』・『万葉集』などの「モノガタリ」とはどう違うのか、二つ目として、永観二年(九八四年)頃の源為憲の撰にかかる『三宝絵詞』^(注2)に「物語と云ひて女の御心をやるものなり」とあるように、『竹取物語』がなぜ女性を慰めるのか、『同書』はさらに「物語」は「大荒木の森の草よりも繁く、

有磯海の浜の真砂よりも多かれど……」とつづけ、その大量生産ぶりを伝え、かつ当時こうした多数の凡作は「罪の根、言葉の林につゆの御心もとどまらじ」という低い評価(むろん仏教的イデオロギからいっているのだが)を与えられていたにもかかわらず、『竹取物語』が、少なくとも光源氏の口にする高い物語評価(『源氏物語』巻)の中にあつて、なぜすぐれて物語文学の元祖なのか、といった問題を考えるために、その新しい「主題」、そしてそれはいかなる「主題」であつたかについての私見を述べてきた。同時に外国の方法論の受容に熱心な国文学界の一部において、いわゆる「主題論」なるものははや時代遅れなのかもしれないという危惧にもふれた。

本稿はすなわち三稿目で、私はいぜんとして登場人物「性格論」なる、いささか旧聞に属する変わりばえのしない題目をかかげてみた。登場人物の性格や心理描写のあげつらいこそは、それこそ西洋十九世紀的小説観で、今や挙げてコンピュータによるデータベースや、映像一辺倒のファミコン遊び風の「記号学」の全盛期で、そうしたSemiotiqueにはほとんど無縁の「漢字仮名交じり文」^(注3)によることばの時間と空間においてしか認知することのできない人物論や性格描写については、ほとんど興味を示さない状態に立ち至っている。若い一般読者の大半はもっぱらストーリー中心の映像的刺激、いうなれば主として「絵巻物」を見ながら享受したらしい平安時代の女房たちにある面を通じるものがある。本稿はなおいぜんとして「ことば」によって表現された人物の「性格」を論じてみたいのである。

ところで、「性格」は英・独・仏では character, charakter, caractère である。わが国では一般的にはおそらく英語の character の訳語として流布し、定着したのであろう。ここで私は唐突ながら森鷗外となら

んで日本近代文学の「啓蒙」家、坪内逍遙の青春の逸事を想起する。後年みずから『回憶漫談』という戯著で、研究者間に周知の事実となつた彼の東京大学本科文学部政治学科における試験の失敗である。第二学年のシェークスピアを担当したホートン講師の例の「キャラクターを解剖せよ」の勘違いである。逍遙はcharacterを道徳、品性の面から答えて落第した。私はこれをかならずしも逍遙の学力不足のせいのみとは考えない。森鷗外などもそうであつたが、当時、東京大学へ入学することは欧米の大学に「留学」するようなもので、幼少の頃から江戸以来の文化を深く身につけた日本人青年ほど、外国人教師とうまくいくはずはなかつた。ラフカディオ・ハーンが学生に尊崇されたのは彼が日本婦人と婚し、小泉八雲と名告つたからである。逍遙は江戸戯作の「文学的教養」がありすぎたまでのことである。いかに脱亜入欧の時代であろうと、日本古来の文化の深層はそう短期間で変わるものではない。正直で鋭敏ですぐれた日本人学生ほど、異国の言語文化に完全には同化しえないものである。

ただここで一寸、いかにも研究論文めかした理屈をつける。すなわち本邦初出の辞書、J・C・ヘボンの『和英語林集成』の初版は慶応三年（一八六七年）、再版は明治五年（一八七二年）、三版を重ねたのは明治十九年（一八八六年）となるところから、この辞書が英語学徒の間に広く迎えられたことを証する。このころみにcharacterの説明をみると、「名詞、文字・しるし・評判・生まれつき・たち・品行」とだけある。また『明治ことは辞典』集録十一種の中、専門語化される方向をもつ辞典、『普通術語辞彙』（明治三十八年）の、英character・独charakterの項には、「本質的に於ては品性と謂ふことと毫も異なることではない。併し我が邦にては、品性と謂へば価値的観念を伴ふ性格を意

味する習慣」だと定義している。さらに、漢語としての「性格」については、諸橋轍次『大漢和辞典』・『大言海』・『日本国語辞典』（小学館版）などの代表的辞典は、李中、獻「張拾遺」詩、「官資清貴近圓墀」性格孤高世所稀の一句を引いてヘボンの訳語の「品行」に近い。

ところが英語のcharacterは語源的にはギリシア語、ラテン語の「彫る」からきたもので、「印刻・押印の道具」↓「印刻・印象・表象・記号」↓「性格」の意に発展した語である。英語の口語でHe is a characterといえは「やつは変わり者だ」という意味であるが、日本語の場合とちがって、その人柄を百パーセント賞賛することばである。『莊子』にいう「畸人者畸於人而俟於天」の「畸人」ほどの文化的奥の深さはないものの、英語のキャラクターには悪意、侮蔑の意味はない。だが、そういう形容詞を冠しないかぎり、このcharacterはとくに文学作品の中のコンテクストで使用されると、漢語・和語の意、すなわち、若き逍遙の理解からずいぶん離れたものとなる。英国「言語学会」The Philological Societyが一八五七年（安政四年）から着手し、一八八八年（明治四年）に第一巻の刊行となるオックスフォード版「A NEW ENGLISH DICTIONARY ON HISTORICAL PRINCIPLES」（最終刊第十巻第二部は一九二八年（昭和二年）は、おそらくホートン先生時代の文学用語としてのcharacterの意味を伝える最も正確な文献の一つである。今その第二巻（一八九三年刊）で、該項目を検すると、十七番目に、「小説家や劇作家によって際立った属性や特性を賦与された性格。同様に舞台上で役者の演じる性格、ないし役割（セリフ）をさす」と定義する。ホートン先生の試験問題の主旨はおそらくこのようなものであつたにちがいない。逍遙の落第は彼自身にとっては不運であつたにはちがいないが、この不運が彼をし

て後の沙翁全訳業の達成、演劇改良、劇作家、小説家、英文学者、教育者としての文壇・教壇の偉大な逍遙とならしめたのだが、逍遙の日本近代文学での苦闘は、後、やはり東大の英文学科を無事卒業し、当時の官費留學生のエリートとしてではあるものの、不平たらたらでロンドンに留学した夏目漱石の英文学に対する「欺かれたる不安」や、「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同義語の下に一括し得べからざる異種類のもたらざる可らず」という苦悩につながっていくのである。また漱石が「余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短きにも関らず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。ひそかに思ふに英文学も亦かくの如きものなるべし」という述懐の中の「漢籍」(左国史漢)を、名古屋の「貸本屋大物所蔵の江戸戯作類」や母に伴われて通った「東西歌舞伎の名古屋興行見物」に読みかえ、かつ「英文学」をホートン講師の character に置きかえれば、西洋近代とまともにぶつかった日本近代文学一般のある種の宿命のようなもの一端が見えてくる。

「性格」とは英文学では要するに性格批評、性格解剖のことで、もともと小人の説や街談巷語、道聴塗説者の造る所を忌避してきた日・中・韓の東アジアの士君子にはなじまないものだったが、逆に character そのものについては西洋では紀元前から古典的地位が与えられてきたものである。すなわち、アリストテレスの高弟で、学者、教育者として膨大な著述を遺し、リュケイオンの学園を継いだ最初の人、ギリシアの哲学者テオフラスト(前三七二年頃—二八七年頃)の『性格論』II『カラクテレス』^(注8)という作品が存在するからである。この作品の成立は、およそ前三二二年から三〇〇年間の間に書かれたもの^(注9)という。その冒頭の「緒言」は後人の擬作といわれているが、そこに

は本書執筆の動機・目的が明快に述べられている。

——「すべてのギリシアが同じ大気下に横たわり、すべてのギリシア人が同じ教育を受けながら、われわれが同じ気質の性格をもつようにならなかつたのは、一体どういうわけなのか……(中略)私は長い間人間の本性をたんねんに観察し、九十九歳まで生きのびてきたので、またその上さまざまな気質の人々と交わり、世の善人どもや悪人どもを仔細に比較考察したので、彼らがそれぞれ日常生活の中で演じている所業を書き誌しておかねばならないと考えた。そこでこれらの人々に見出される常套的なやり口と生計のやり繰りの仕方を類型的に君に語ろう。そのわけは、ポリュクレスよ、われわれの息子たちにこうした記録を遺しておけば、彼らはよりよくなるだろう、と私は考えるからだ……(下略)」と。

『性格論』は人間のさまざまな「性格」——『カラクテレス』について、「へそまがり」、「おべっか」、「やぼ」、「無頼」、「恥しらず」、「まぬけ」、「不潔」、「虚栄」、「卑賤」、「ほら」、「ごうまん」、「臆病」、「毒舌」、「よくばり」などといった人間の「性格」について、まず簡単な定義をあたえ、当時の習俗を諷した三十の短篇からなるが、こうした書き方は後、主として英文学史上、十七世紀の文人たち、たとえばジョゼフ・ホール、サー・トマス・オーバーベリ、ジョン・アールなどのモデルとなり、実際、英国では一六〇五年から一七〇〇年の間に五十七篇の『キャラクターズ』the Characters が書かれたといわれる^(注11)。

さて、こうした「性格論」はわが国の『記』・『紀』・『風土記』・『万葉集』の旧辞に胚種的には存在するものの、また正史たる『六国史』中にみえる人物の「列伝」風の文体にも漢文修辞による類型的表現で

点在するものの、これをいわゆる「物語文学」¹¹、「女の読者」、「かな文字文学」、いかえれば公に対する私、ハレに対するケの文学作品に最初に描きえたのが『竹取物語』であった。『竹取物語』は romance と tale とが結合した fiction だといってよいと思うが、以下にとりあげる五人の貴公子たちの性格描写は、後にフィクションとしては『源氏物語』で絶頂をきわめ、イッヒ・ロマンとしては『蜻蛉日記』以下の女流日記文芸や随筆雑纂的なものとしては『枕草子』においてきわまる。が、『性格論』的な作品論としては十三世紀はじめの頃に出た藤原俊成卿女の作かとされる『無名草子』あたりが最初のまとまったものであろう。私が『竹取物語』登場人物「性格論」を開始する前に、このような無用とも思われる長文の序を書く衝動をおさえかねたのも、西洋のいかなる Romance の歴史も、ある意味では「decadance」の記録であるように^(注12)、わが『竹取物語』も所謂は漢詩、漢文による公の文学に対しては sub-literature にすぎないし、そういう視点からこの作品をいささか私流に読み直してみたからである。

日本古代文学において「性格論」的言述がすぐれて女性的なものであるのなら、すぐれた恋愛物語も女性的であるはずである。『竹取物語』の主題がかぐや姫をめぐる「恋愛物語」だとした以上、いかなる人物がいかにように描写されているかを日常的「ケ」の次元においてたどってみたいのである。

『竹取物語』には如何なる人物が登場するか。作者が明確に姓名を付したものを逐次列挙していくと、

- ① 讃岐造磨^(さきのみやつこ) ② 齋部秋田 ③ なよ竹のかぐや姫 ④ 石作皇子 ⑤ 車持皇子^(くるまりのみこ) ⑥ ほうかむり(仙女) ⑦ 阿倍御主人^(あいらしのみむらじ) ⑧ 大伴御行 ⑨ 石上麻呂^(いものたり・もうたり) ⑩ 漢部内磨 ⑪ 玉卿 ⑫ 小野房守 ⑬ くらつ磨 ⑭ 中臣のふさ子 ⑮ 高野大国 ⑯ 調の岩笠
- となる。また、姓名はつまびらかではないが、登場人物と考えられるものに、

- ⑰ 妻の嫗 ⑱ 天人の粧したる女 ⑲ 大伴御行の家臣 ⑳ 船人 ㉑ 楫取 ㉒ 帝 ㉓ 天人。(なお本文中の「頭中将」は㉔と同一人物と考える)

らが登場する。さらに民衆や、その他の貴族、六衛府の連合警備隊二千人など合わせれば、きわめて大多数の人物が登場するのであり、物語の全空間は天上、地上、海上に繰り広げられる一大スペクタクルとなる。

ところでこうした大勢の登場人物の中から、『竹取物語』の主題——かぐや姫をめぐる恋愛物語——に即しての人物論に堪え得るものを選ぶには、やはり前稿を前提にしなければならない。当然のことながら、登場人物の中の主要メンバーの「性格」は、主題の成長によって変容するからである。そこで前稿で説いた『竹取物語』を構成する(A)竹取説話、(B)妻あらい説話、(C)羽衣説話の三つの物語単位を通して登場する主人公はかぐや姫であった。さすればかぐや姫の性格とその描写について真先に論じるのが定石かもしれないが、作者は物語の初めに彼女の性格をチラリとのぞかせただけ^(注13)、主要部分は(B)で占められている。因みに叙述量は全文の六十五パーセントに達する。この主人公の性格は六人の求婚者の奥に隠され、特に(B)妻あらいの部分^(ヒロイン)は滑稽な駄洒落によるユーモア小説の感があり、主人公は表面に出ることはない。しかし、六人目の帝の求婚から(C)におけるキャタストロ

フィに至って、それまでの滑稽譚の調子は一変し、読者の虚を衝くかのようにかぐや姫の「性格」が暴露されてゆき、悲劇的な終幕を迎える。いいかえれば、かぐや姫と帝の思いや情緒のみが、「もののあはれ」を主調とする宮廷恋愛物語として、それまでの(A)(C)と異質なセンシビリティでみだされているということである。帝とかぐや姫との恋愛感情こそが、かさねて紫式部をして「物語の元祖」といわしめたきわめて重要な本質だともいえる。

さて、このように初めに物語の主人公が光りかがやく絶世の美女だということのみを強調し、現世の女としての性格描写を控えたのは、つづく妻あらそいにおける男たちの狂奔する心理を効果的にしようとした作者の非凡な技法であろう。したがって登場人物たちの性格描写についての議論も(B)から開始し、次にかぐや姫と翁という順序を踏まざるをえないことになる。

(一)石作の皇子は「心したくある人」。

これが作者の皇子に賦与した「性格」である。田中大秀の『解』は、「天の羽衣」の段に「た、かふべきしたくみをしたりと云々」とあるので、「み」の字を補い、語義については、『宇治拾遺物語』九巻の「……彼物は此更につかはんと、したくし思ける云々」や、同十三巻の「……にぐべきしたくをして」を用例として引き、「何れも、下巧と云意と聞ゆ。夕字・ミ字を略たる言か」と説き、かつ、『唐書』「百官志」の「度一、支、掌、天下租賦物産豊約ノ宣。水陸道之利、歳計所出而支調之」を引き、「度支二字共計意なれば、したくみと云も、下の心にはからひ用意する意にて自づから通へり」としたところまでは、さすが宣長門下の逸材たるを思わせるが、そのあとがいた

だけない。すなわち「唐の官名は、度支と云ふなるを、皇国には下上に支度と用いたのは……」とつづける。唐の官名は「度支」(度支部、度支表など)に間違いはないが、『北周書』『王悦伝』などでは「支度路程」(諸橋『大漢和辞典』)とあるに同じく、「支度」||シタクと訓む漢語とみるべきで、意味は『下学集』の「支度(義ナリ)」が正解であろう。そうすると「したく」は心用意ある人という意味で、思慮深い人というよい意味にとれるが、後の筋の内容から察するに、巧智、肚に一物あるとか、要する目先の利く悪い意味としか考えられない。そうすれば「したく」は二重の含義をもつ皮肉の意となる。したがって石作の皇子はすこぶる現実主義的で、「仏の御石の鉢」なんぞは、「てむぢくにふたつとなき鉢を、百千里のほどいきたりとも、いかでかとするべき」と考え、御石の鉢を實際に取りに行こうとして天竺まで渡航する気ははじめからない。さっそく贗作にとりかかる。と同時に「かぐや姫には「今日なむ天竺へ石の鉢取りにまかる」と一本クギをうって、三年ほど経て頃をみはからつて姫のところに出かけるところあたりは、まさに「心したく」であるといつてよい。難題探索の方は、はじめからなげてはいるものの、姫に対しては、「この女見では世にあるまじきこちのしれば、天竺にある物ももてこぬものかと思ひめぐらす」ほどの情熱と野望をいだいている。したがって、肝腎の鉢と大和国十市郡の「ある山寺に、びんづるの前なる鉢のひた黒にすすびきたるをとりて、綿の袋に入れて、つくり花の技につけ」た贗作であり、それに「海山のみちまにこころをつくしはてみいしのはちの涙なぐれき」と、いかにも心労の旅路の果てに探しあてたかのような惻々たる歌を添えて姫の前にさし出す。その平然たる態度と度胸は姫からその詭計があばかれるところとなっても、いささかもぐずれない。すな

わち、かぐや姫の「おく露のひかりをだにぞやどさましをぐらに山にて何もとめけん」という返歌の「をぐら山」で、「ひた黒にすすづきたる」鉢の出処が露見するや、すかさず、「しら白にあへばひかりのうするかとはちを捨て、もたのまる、かな」とひらき直り、破れかぶれのいでふたたび言い寄るのである。機に臨み、変に應じて姫を手中にしようとするふてぶてしさは、すくなくとも宮廷に育った皇子に似ない。ましてや後に王朝貴婦人の浪漫的憧憬の対象となった絹ずれの貴公子などは、その性格・挙措・心理においてまったく別次元のものであり、かかる厚顔不遜な性格が皇子に賦与された「したく」なる「カラクテールス」であった。

ところでこの一段は、かぐや姫と石作の皇子との掛け合いが中心である。武田祐吉氏は姫の返歌について、「かぐや姫がどうして大和の国で求めたことを知ったかの説明がないのは、物語の不用意である。変化の人だから見通したというのかもしれないが、恐らくそうではあるまい」と説かれ、三谷栄一氏も、「姫が返歌に『小倉山にて何求めけむ』といったのは、つまり皇子が鉢を求めに行った『大和国十市郡にある山寺』なるものが、この小倉(椋)山の山寺であることを、姫は前から知っていたことになる。もしそうでなければこの歌の意味はなくなる。それであるのに、その辺の消息を少しも言及していないのは、不用意であり、この物語の欠点を示すものかも知れない」と論じられたが、私見ではこの時、かぐや姫は石作の皇子が鉢を何処で手に入れたか一向に存知していない方が、いっそう話の興趣をもりたてる効果があるようにおもわれる。なぜならば、そもそも姫にあらかじめ難題の品の真贋をことごとく見破る超能力があるとすれば、なにも五人の貴公子たちのつぎつぎの難題譚を展開させる必要はないのではな

いか。かぐや姫はあくまでも神仙の女、「変化の人」として現世の秩序とは異次元の性格の女として登場させられているのである。しかし、かつて指摘したように、^(注17) 姫は十五歳から十八歳までの年齢で、この世の約束に従うべく結婚の申し出に応じているのであって、物語の語り手は難題が成功すれば姫をその男と結婚させることを前提として話をすすめているし、読者―聞き手もそう信じているからである。したがって、姫に難題の品々の真贋をただちに見破る力があることが、初めから分っていれば物語のスリルもサスペンスも消失するのである。(そのことは次の車持の皇子の話で、皇子が玉の枝を難波からもつて来ることを聞いた姫に、語り手は「我は皇子にまけぬべしと胸うちつぶれて思ひけり」と述べていることから分る)。

そこで「小倉山……」の歌であるが、かぐや姫は皇子の呈した「海山の……」のパセティックな歌の調子にまどわされずに、鉢の方を真先に検した。すると鉢には、「光やはあるとみるに、螢ばかりの光なし」ということであつた。岡一男氏によると、ここで姫がすかさず「小倉山……」と詠んだのは、暗の縁語にそれをもつてきただけであり、そして、「おく露の光……がたちどころに誘導訊問の効果を發揮し、姫は知らなくとも、小倉山といわれてみれば、それが「脛にキズもつ皇子にピンと来、思わずへ白山」のと居直らせたところが却って面白い」と説かれ、『枕草子』七十七段の「職の御曹司におはしましける頃」の条の例の定子中宮と清少納言の対話の例を引きつつ、「偶合」の妙を指摘されている。^(注18) 三谷栄一氏の御説は、姫の返歌は皇子が大和国十市郡の山寺で、御石の鉢を求めたことを知っていなければおかしいという前提に立っているもので、そのために「小倉山」と歌い出されて、「白山に」と返歌したのも北陸道の加賀国の「白山」だと

るのだが、私見によれば、ここはたんなる連想だとおもわれる。なぜなら、竹取の翁の邸は、塚原鉄男氏によれば、^(注19)『倭名類聚抄』に見える大和国広瀬郡散吉^{サヌキ}であり、かりにこの説が失当であっても、十市郡の小倉山寺から山つづぎの高市郡の高取村であり、いずれにしても、かぐや姫は藤原京に近いところにある翁の邸に住んでいたはずだからである。それゆえに、光のない鉢をみて近隣の小倉山をもちだしても不自然ではない。それに対して皇子が「白山」と応じて、それが加賀国の白山であっても実在の地名に拘泥するのは、初歩的ないい方ではあるが、少なくとも仮作物語の正しい読み方ではない。なおこの場面は大秀の『解』の注するごとく、「小倉山と云るに對て、姫の容貌の色白くて光あるを白山と取成せるなり」——「赫映姫、皇子が小倉山より取来給へる事は、可^レ知にあれど无^レ光に付けて、小倉山よりや取来給ひけん」と云るが、按に当れるさまに、語れるなるべし」と、かさねて美と醜、清と濁との「偶合」と解釈すべきであろう。本文は「はち（鉢・恥）を捨ててもまたいひけるより、おもなき事をば、はちをすつとは言ひける」で終る。これが石作の皇子のキャラクターレスである。

(二)車持の皇子は「心たばかりある人」。

車持の皇子は前回の石作の皇子のように、たんなる目先きの頓智でたやすく事を運ぼうとするような男ではない。また「この女見では世にあるまじき^(こもなむ)こちのしければ……」といった逆上型には紹介されない。ただちに「心たばかりある」その具体的行動が示される。語り手がこの皇子に賦与した「性格」——「たばかりある」の実は後になれば暴露されるが、最初に語義を確認しておこう。大秀の『解』は、

「たばかり」を「石作ノ皇子のしたくみに同じ」だとしているが、『大言海』によると「た」は接頭語で、たんに「はかる」という通常の解釈の他に『安西随筆』巻一の「たくみはかるの略語カ」を引き、さらに、「謀一タハカル」（『字類抄』）、「計、ハカル」（『神代記』）、「思兼神深謀遠慮一タバカル」（『神代記』）、「大略一タハカリ」（『継体記』）を引き、「謀リテ欺く」、「タブラカス」、「欺罔」の義をあてている。そうすれば石作の皇子の「したくみ」よりも、こちらの方がもっと大仕掛けで、謀計、策略、智謀……因みに最新の英語訳では Prince Kuramochi was an *artful* man となっている。『ロングマン』の語釈では *adroit in attaining an end, often by deceitful or indirect means; wily, crafty* (ある目的を達するために機略に富むこと。しばしば詐欺・不正直の手段をとる。手練手管の、悪賢い……) となる。

ところが彼の「たばかりある」という「性格」は事が成功しそうになると意気軒昂たるものの、不首尾に終ると石作の皇子のようなふてぶてしさがなく、途端に意気消沈、いくなればクレッチマーの性格類型の一つ *cyclothymia* (躁うつ性気質、循環性気質、回帰性気質) の典型である。彼は大胆かつ細心、作家中村真一郎氏のいわれるように、遠大な計画に基いて敵を欺くには先ず味方を」という兵法に則って大芝居を打つ。もちろん、石作の皇子の場合と同様に、敵かぐや姫には、「玉の枝とりになむ^(チシ)まからむ」とクギを打っておくことを忘れないうが、この皇子が話の前半において精を出すのは、むしろ味方の目を欺くことにあった。すなわち、勤務先の朝廷には「筑紫の国に湯あみにまからむ」と湯治行きにみせかけて休暇を願い出、出帆するに際しては「仕うまつるべき人々」を難波まで送らせて、同行するのはごく側近のものにかぎったのである。以上で世間の疑惑の目を封じ、三日

ばかりで漕ぎ帰って来て、かねて準備させておいた秘密工場で当代一流の鍛冶匠六人を召し、全財産をはたいて玉の枝をつくらせる。しかも、出来上がった玉の枝を持って極秘裡にふたたび難波に赴き、自分の邸には、「船に乗りて、かへり来にけり」と報せてやり、玉の枝はそこから往来の人々の目にとまるように長櫃に入れて京へ運ぶ。そして皇族のような身分高い知識人のみに知られる蓬萊の玉の枝を、わざと民間に俗諺として流布していたおもわれる「うどむぐゑの花」に言い換えて、その花を持ち帰ったように「情宣」する。この「大芝居」がまさに成功せんとする時の彼の滔々たる長広舌は、まさに波瀾万丈、すこぶる劇的な蓬萊山への航海譚であるが、それがまたきわめて合理的時間で細工されている。

すなわち、往路五百日、復路四百日、合わせて九百日、「(さいとしの)」の二月の十日「ごろ」の出発として時を合致させ、いよいよ蓬萊山における「天人の粧をしたる女」との邂逅の場面に至っては「この山の名は何とか申す」ととふ。女答へてはいはく、『これは蓬萊の山なり』とこたふ。これをきくに、嬉しきことかぎりなし。この女に「かくのたまふは誰ぞ」と問ふ。『我が名ほうかむるり』といひて、ふと山の中に入りぬ」と、まるで実際に自分と対話してきたかのようない方をし、女にはいかにも異界の仙女らしき名前まで出して、迫真性をもたせようとしている。岩波古典文学大系本に依った新英訳は島原本のみにある「この女に」の「に」を欠くため、主語が女となるためか、あるいは仙女の名前が諸本間に統一を欠くためか、残念ながら、この部分はカットされている。

さていよいよ玉の枝をつかむ条は、「その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。黄金・白銀・瑠璃色の水、山より流

れいでたり。それにはいろ／＼の玉の橋わたせり。そのあたりに照りかゞやく木ども立てり」と、玉の枝の所在地を竹林に育った山賤の竹取りの翁にはわざと見当のつきかねるようになり、意識的に仙界異境・極楽浄土の幻想的世界を現実のもののように語りきかせる。車持の皇子の「たばかり」ぶりの細心周到さはこの辺が絶頂である。

だがしかし、語り手は皇子の悲壮な蓬萊山漂流譚のフィクションに、たった一言だけ口を滑らせ、彼が完全にたばかりえなかつたことを暗示している。すなわち、車持の皇子が蓬萊島に到着する間、波浪にもまれ苦しい航海をつづけている時、「ある時にはかて尽きて、(くさの木の根)草の根を食物としき」と語り手は皇子にいわせている。すでに『竹取物語抄』以来指摘されているように「或る時は」・「或る時には」と六度もたまたみかける文章の調子は『文選』『海賦』の文勢に従って対句的表現であるから、あまりことごとしくその写実性をあげつらうのもいかがかと思われるが、注意深い読者、あるいは聴き手なら、海上で糧尽きて「草の根」を食うとはすでに彼の話が真赤なウソであることに気づいて微笑するにちがいない。少なくとも欧米人は承知しないだろう。果して英訳は「At times, provisions exhausted, I consumed the roots of island plants」と海上の孤島に立ち寄った風に合理化をはかっている。英訳の方はともかくとして、馬鹿正直な翁はそのことに気づくはずもない。レトリックが現実を圧倒しているからである。逆の言い方をすればこの物語の作者の心憎いまでの技巧であろう。そしてこの蓬萊島漂流譚に感心しきった翁の歌に返して詠んだ「我が袂にふかわければわびしさのちぐさの数もわすられぬべし」という歌には皇子の押しかくされた喜びと期待の表情がうかがわれる。だが、この「心たばかりある」策謀家は、先の「あるときにはかて尽きて、草の

根を食物としき云々」で危かったが、相手が翁だったので無事だった。が、味方を欺き得たはずの彼が、まさにその味方によって思いがけない不覚をとる。この皇子は玉の枝を贗造させた工匠たちに製作費を支払わなかった己れの吝嗇な性格のために、そのたばかりぶりを完膚なきまでに打ち砕かれたのであった。「皇子は我にもあらぬけしきにて、肝きえ（ぬべきこちして）ゐたまへり」と、九仞の功を一簣に欠いてしまった時の彼の表情、さらにかぐや姫の面前で、「まことかと聞きて見れば言の葉をかざれる玉の枝にぞありける」と姫から詠みかけられて、完璧であつたはずのトリックが見破られてしまった時の「立つもはした、居るもはした」というきまりの悪い狼狽ぶり、そして、「かくてこの皇子は『一生のはぢこれに過ぐるにはあらじ。女を得ずなりぬるのみにあらず、天の下の人の見思はむことの恥づかしきこと』とのたまひて、ただ一所深き山へ入りたまひぬ」ということになる。こうした話の展開を考え合わせれば、車持の皇子の大胆・細心・智謀・策略……といった「たばかり」の「性格」の属性として、さらにもう一つ「臆病」という性格をみてとることができる。ことここに至つて皇子は完全に躁から鬱の状態に転じる。知恵はあるものの石作の皇子のような度胸に欠ける車持の皇子は、居直ることもできずに、かぐや姫からたくさんの謝礼を貰つて、自分たちの行動が皇子に致命的な打撃をあたえたのも知らず、欣喜雀躍として引き揚げて来る工匠たちを待ち伏せて、「血の流るるまで」打ち懲らし、あまつさえ工匠たちがせっかく貰つた礼物まで取り捨てさせてしまったのである。これがかつてこの物語がはじまる時に、翁が、「このたびはいかでかいなび申さむ。人さまもよき人におはす」といって姫に結婚をすすめた車持の皇子のカラクテーレスであつた。語り手は

最初に「たばかり」と皇子の「性格」を規定し、彼の作中の行動を右のように描いてその正体を暴露した。

(三)阿部の御主人は「財ゆたかに家広き人」。

ここで注意をしておきたいのは、前二皇族の性格描写の方法ががらりと変わったことである。石作の皇子、車持の皇子にはそれぞれ「したく」「たばかり」と、はじめに具体的な性格用語の言述があるので、われわれは彼らの作中における行動によつてその性格の正体を理解することができたが、こういう風に作者、もしくは語り手が登場人物の性格を断定的な文言で表現しているのは、この二皇族に限られていて、他の登場人物にはほとんど見あたらない。その理由について今のところ、私にはいかなる判断も下せないでいる。作者の諷刺精神の激越さの理由とその性格描写の露骨さの必然性については、これから述べる三人のそれとの本文に即した比較において考察する以外にない。結論を先取りすればこれからの三人の身分は臣下で、それだけにより写實的に語られているという平凡な事実である。語り手、もしくは作者による断定的な性格描写が少ないために、彼らの出自や環境や行動などから、それぞれの人物の「性格」を類推する他ない。つまり読者と作品との「共犯」である。

そこでまず、阿部の御主人の「性格」を知る手がかりは先きに引いた「財ゆたかに家広き人」という彼の環境である。なお官位は本稿では「右大臣」をとつたが、諸本「左大臣あへのみむらし」とあるのを『解』が『続日本紀』にみえる実在の人物が左大臣となつていないので右大臣と改めたのに従う。こうしたことが、ただちに彼の性格の具体性を表示するものではないが、かぐや姫から要求された火鼠の裘を

手に入れるために、彼のとった手段を導くのがこうした環境的事実である。すなわち、その人となりは前二皇子とうってかわっておっとりとして、愚直で、心すなおな右大臣が登場してきたことになる。こうした連想が確実性をもつのは右大臣阿部の御主人が国際的貿易商人でペテン師の「王卿」という男にまんまとひっかかって、とんでもない贖物の裘を法外な価格で売りつけられ、しかもそれが贖物であるとはつゆしらず、唐土の方を向いて伏し拝む時である。本文中、王卿からの書簡が二通あり、わが国物語文学史上散文による和文消息挿入の初出である。第一通目の王卿からの手紙では、火鼠の裘が「なきものならば、使にそへて金を返したてまつらむ」と返金を約束したものであったが、二通目では、「火鼠の裘、かろうじて、人を出だして、求めて奉る。今の世にも昔の世にも、この皮はたはやくなき物なりけり。昔、かしこき天竺の聖、この国にもてわたりてはべりける、西の山寺にありと聞きおよびて、おほやけに申して、からうじて買ひとりたてまつる。価の金すくなしと、国司、使に申ししかば、王卿が物加へて買ひたり。今金五十兩賜はるべし。船の帰らむにつけて、たびおくれ。もし金たまはぬ、裘の質返したべ」とある。本文中「この国」は王卿の国唐土をさす。王卿は唐土から小野房守に書簡を託して、阿部の御主人に裘を手渡すにはもう五十兩よこせといっている。しかも商人王卿と右大臣との直接取り引きではなく、外国貿易だから政府（おほやけ）の指示により、裘を所蔵する西の方の山寺に役人（国司）を通して交渉させた結果、五十兩足りないという。五十兩出さなければ裘の質を返せといっている。右大臣が質を返しても前金は返さないのだから、彼と王卿とでは土台役者がちがう。このような奸智にたけた書簡は今も昔も国際間の商取引きでは茶飯事のことだろうが、

日本の右大臣はその掛け引きが一向に見抜けない。見抜けるどころか、この御仁すっかり嬉しくなつて、つぎのよう狂態となる。あえて能狂言ぶりの名訳をかかげると――

「何と仰せられる？ 極少少の金のことぢや。屹度送り申すで御座らう。うれしくも手に入れますまいて、送りこしたことはある。イヤ歸命頂禮、王卿様様！」といつて、唐の方を向いて伏し拝まれた。――

右大臣阿部の御主人の性格はおっとりした心直きお坊ちゃんというよりも、むしろ暗愚、魯鈍、愚直さ以外のものでない。裘の美麗さに幻惑され、それが果して不燃性のものか確かめてみることも忘れ、「御身のけそうもいたくして、やかてとまりなむぞ」と意気こんで、かぐや姫のところへ押しかけるのだが、車持の皇子のように、いきなりずかずかと縁に這い上がることもできず、門前に佇立しているところなぞは、一段と気弱なお人好しに描かれ、語られていく。そしてかぐや姫の面前で、裘が「めらめらと焼けぬ」ということになり、ニセモノであることが決定的となった瞬間、「顔は草の色」というしよげかたである。岡一男氏がすでに指摘しておられるように、裘が実際に火に焼かれてしまう以前に、物語の作者は語り手を通して、「火に焼けぬことよりも、けうらなることならびなし」といって裘を評する伏線を張っていることから、阿部の御主人のキャラクターを作者・語り手は読者・聴き手とともに冷笑しているのである。

（四）大伴の御行……「大納言」と、まず官職が紹介される。右大臣の下僚である。「性格」についての具体的な記述がないのは、前段と同様である。右大臣は金の力で得ようとした恋であるから、失恋の痛手も生命にかかわるほどのものではなく、顔色が変わる程度のものであった

が、こんどは命がけである。官職紹介直後の文は次のようにつくづく。「君（天）の使といはむものは、命をすてても、おのが君の仰せをばかなへむとこそ思ふべけれ」とか、「なむぢら君の使を名を流しつ。君の仰せ言をばいかはそむくべき」とか、さらに、「この人々ども帰るま（入とも）でもひをして、我はをらむ。この珠取りえでは家にかへりくま……竜の頸の珠とりえずば帰り来な」とかいった大伴の御行の口吻の中に、これまでの三人に見られなかった「性格」の一端がうかがわれる。しかし、これまた彼の出自と環境からくるものである。すなわち、大伴氏が『万葉集』巻十八の「……大伴の 遠つ神祖の その名をば 大來自主と 負ひ持ちて 仕へし官 海行かば 水浸く屍 山行かば 草むす屍 大君の辺にこそ死なめ 顧みはせじ」という建国以来の武勲の誉れ高き名門であることは天下周知のことだから、御行には作者・語り手の紹介がなく、いきなり家の子郎党を集め、君臣間に当然のこととして存する武人的精神の台詞がいきなり飛び出して、当時の読者・聴き手には少しも異和感がなかっただろう。また、「……それ（竜の頸の珠）を取りて奉りたらむ人には、願はむことをかなへむ」といったのは、「恩賞をもつて決死の士を募らうとするので、君の恩と臣の忠とはギヴ・アンド・テイクの關係にあつた」（注25）ことが、きわめて庶民的なレベルで描かれているし、さらに「いもひ」の漢字は「齋」であり、武家にあつて家臣や家族を遠く旅立たせる時に行う潔斎の儀式である。

こう考えてくると、大納言大伴の御行は一見、いかにも武家の棟梁らしく勇氣に富み、気骨あくまで稜稜、生命の危殆をまねくいかなる難事にも屈しない豪胆で、しかも成功した家臣には恩賞を約束する理想の武人の「性格」をもつかにみえるが、実はそうではない。まず御

行の「竜の頸の珠とりえずば帰り来な」は「大君の辺にこそ死なめ」の一方的な押しつけで、かの壬申の乱の後裔の吐く台詞ではない。彼の強要する君臣間の信義は、すでに、「かかるすきごとをしたまふこと」とか、「親・君と申すとも、かくつきなき事をおほせたまふこと」といった家来たちの非難めいた言辞の中に、当初から私的エゴイズムの乱用として裏切られている。大伴氏の家憲である「大君の辺にこそ死なめ」という精神は、家来たちには完全にアナクロニズムとしかうつつてはいない。しかも御行は家臣たちにはすでに欺かれたことも知らず、「もとの妻どもはみな追ひ払ひて、かくや姫を迎え納れるための唐土風の壮麗な御殿を造営して独り明け暮れる。

ところが家人どもは、すでに主君を裏切っているのであるから、「年越ゆるまで音も」しない。だが、彼はそのことを憎むことすらできない。この尚古思想に凝り固まった時代遅れの頑固者は、途端に気弱くなる性格であると同時に、虚勢をはるといった、臆病と強気を極端に合わせもつた二重人格者である。したがって、家来たちが翌年になつても帰来しないことが分ると、すぐに「心もとながりて、いと忍びて、ただ舍人ふたりめしつぎとして、やつれたまひて」難波のほとりに出かけざるをえない。物語の語り手は大伴の御行の性格をはじめは強気一本で押し通し、つぎに難波から筑紫海上に乗り出す悲喜こもごもの航海譚での楫取りとのやりとりの中に、性格心理の交錯をあざやかに描出しながら、急転してその本性をあばき出す。こんどは車持の皇子のようなフィクションの航海ではない。御行自身の実体験である。彼は難波に出かけてもまだ部下たちを信じている。すなわち、「大伴の大納言殿の人や、船に乗りて竜殺して、そが頸の珠とれるや」と従者の舍人に問わせるのである。下賤の人々にいきなり「大伴の大

納言殿の人や」と切り出したところに神代以来の武門の名家たる彼の誇りが露骨だが、それに対して船人たちは、「あやしきことかな」とあざ嗤い、「^(もはら)さるわざする船もなし」とにべもない返事が返ってくる。すると彼は「をぢきなきことをする船人にもあるかな、え知らでかく言ふ」と心中おだやかではない。大伴氏の権勢など今さら持ち出して通用しない世間である。朝廷で威勢をふるった大納言伴宿禰善男が応天門火焼連座の罪に問われ、伊豆国遠流となり、その資財田宅を勸録させられたのは清和天皇貞観八年九月のことである(『三代実録』^(注26))。にもかかわらず物語での大伴氏は、つづけてドン・キホーテばりの台詞をまくしたてる。すなわち、「我が弓の力は、竜あらば、ふと射殺して頸は取りてむ。おそく来るやつばらを待たじ」といつて「筑紫のかなたの海」に漕ぎ出してしまふ。ただ先きに引いた「をぢきなきこと云々」中の「え知らで」を三谷栄一氏の説かれるように、「この俺を武門の家の大伴氏とも知らないで」^(注27)とすると、すぐ後の「我が弓の力云々」へとつづく心理の流れがよく分り面白いが、やはりここは船人が問う人の誰なるか、つまり武門の名門たる大伴氏であることを船人たちが知らないものであって、双方の意志が全く通じていないことが逆に面白いのである。

大伴の御行の強気はいよいよ航海に出て、空模様の怪しくなる頃から怪しくなる。そしてかれの強気も矜持も暴風雨とともに消し飛ばされてしまう。すなわち、「をぢきなきことする船人にもあるかな」というさきほどの恫喝は嵐とともに吹き飛ばされ、「船に乗りては楫取のまうすことをこそ、高き山とも頼め。などかく頼もしげなきこと^(ナシ)を申すぞ」と命が助かりたい一心で哀願愁訴となる。一転して彼の臆病、愚直ぶりは楫取りのレベルと同じことで、大伴氏らしく従容とし

て死に赴くけはいなど微塵もない。しかも彼が竜の頸の珠を取ること
に失敗して、命からがら播磨の明石の浜に上陸するあたりの悲嘆、滑稽、
気まわりわるさの交錯した心理描写は、いちだんと生彩ある筆致
で活写され、さらに容儀体面を重んじた王朝貴紳のうち、大納言とい
う高官のこの人物に物語りの語り手は、「腹いいとふくれ、こなたか
なたの目には^(御目)李をふたつつけたるやうなり」といつて下司たる国司を
して失笑させている。そして彼の性格が一層はつきりするのには、大納
言大伴の御行が失敗して帰って来たと聞くや、さきに竜の頸の珠を取
りに遣わされまわったく動こうともしなかつた家来たちが、「竜の頸の
珠をえ取らざりしかば^(波にも)なむ、珠のとり難かりしことを
知りたまへば^(しり給にければなむ)なむ、勘当あらじとて参りつる」といつて、のこのこ舞
い戻ったのに対して、彼らを叱咤することはおいて、逆に、「なむじ
らよく持て来ずなりぬ。たつは鳴るかみの類にてこそありけれ。それ
が珠を取らむとて、そこらの人々の害せられなまし。よく捕らへず
なりにけり」といつて、^(物をも)処罰どころか、却って感心させ、^(すかきなりけり)
「家に少し残りたりけるものどもは、竜の珠取らぬ者どもに賜ひつ」と
というありさまを知らされる時である。しかも彼は、「かくや姫^(こいみ)てふ
大盗人のやつが、人を殺さむとするなりけり。家のあたりだに、今は
通らじ。をのこどもなありきそ」といつて姫を罵倒するかたわら、自
分の失敗を滑稽なまでに正当化しようとする。こういう大伴の御行の
性格に対して、「武将であるこの人の性格の、さっぱりしている点が
よく書かれていゝ」とか、「^(注28)些の未練らしいところも見せない剛直な
武将の反面に、よくみる竹を割ったようなきっぱりした性格が滲み出
て痛快である。前々の求婚者達が皆最後まで恋々としたのとは余程趣
きを異にしている」とした評がある。だが、それはやはり、人物の

「性格」の解釈の域にまで到達していない。彼の武將らしきは、すでに筑紫海上の航海譚、さらに明石の浜での滑稽譚で徹底的に否定され、いたはずで、ここに至って「竹を割ったようなさっぱりした性格」などが息を吹き返すわけがない。語り手はそうした解釈をゆるす御行の動作、振る舞いの中に、むしろ彼の「照れ隠し」、「あの葡萄は酸っぱいや」式のイソップの狐の心理に通う武將たるにふさわしくない性格の属性たるもう一つのキャラクターをあげきだしている。いいかえれば大伴の御行という武將を描いたのではなく、かぐや姫という美女に求婚する上流高官の仮面を剥ぎとられた男性一般の性の現実を語っているにすぎない。

(五)石上の麻呂……大伴の御行の官位のすぐ下位にある「中納言」の彼の性格を知る直接的記述は一切見えず、ここはいきなり、「家にかはるるをのこども」との対話からはじめられる。したがってこの段はもっぱら行動・動作・態度について描写のみで、中納言の「性格」を想像するほかない。多勢の召使の男たちに囲まれていることからみると、彼もまた右大臣阿部の御主人と同様、一応、富豪とみえる。しかしこの中納言石上の麻呂という男は、はじめから賈物でいこうとか、イミテーションで誤魔化そうとか、金で勝負をつけようとかいった不埒な考えはおこさない。彼は大伴の御行と同様に難題の品の獲得に対しては身を挺して実物を探そうと考えている。いいかえればかぐや姫への恋には一応真面目だということである。彼に与えられた難題の品は燕の子安貝を取ってくることである。だが、いざその獲得法にあたっては、あまりにも軽率ですぐに他人からの煽てに乗って、しかもすこぶる気が短かい。召使の男たちに何かもつともらしい協力めい

たことをいわれると、ただちに、「中納言よろこび給ひて」である。寮の官人、くらつ鷹という翁には、「中納言額をあはせてむかひたまへり」である。さらにこの翁のひねり出した珍説に対してもう一度、「中納言よろこび給ひて」とくる。こうたびたび嬉しがっていたのは一家の当主、もしくは一族の頭領たる威厳も権力もあつたものでもない。前回の大伴の御行の家人に対する高姿勢とはすこぶる対照的に、こちらは卑屈なほどに低姿勢ぶりを通す。そしてついにはくらつ鷹の珍計に、「いといたく喜」んで、彼が「ここに使はるる人にもなきに、願をかなふることのうれしさ」と叫び、子安貝をまだ手中におさめたわけではないのに、「御衣ぬぎてかづけたまひつ」である。そしていよいよ燕の子安貝をとる段になって、「物もなし」といわれ、状況がかんばしくないと分ると、すぐに「あしくさぐればなきなり」と腹立つ。他人はあてはできず、それじゃこの俺が！「我のぼりてさぐらむ」となる。このような調子でみずから燕の子安貝をとろうとした中納言は、見事に失敗してしまうのであるが、前々の四人の誰よりも気弱で、純情ではあるが意気地がない。つまり、子安貝を取り損って「八島のかなへの上に、のけざまに落ち」て大怪我をしたことよりも、「人の聞き笑はむことを、日にそへて思ひたまひければ、ただ痛み死ぬるよりも、人聞きはづかしくおほえたまふ」カラクテレスなのである。子安貝を取りそこなって失恋し、さらにそうした「わらはげたるわざ」をして病氣になったこと、その愚行に対する「世評」の方が病気で死ぬことよりも恥ずかしいと思う男である。そこでこうした愚直でひたむきな性格だけが、かぐや姫の同情のこもった相聞の歌をかち得ることになるが、それに対して彼は、「かひはかくありけるものをわびはてて死ぬる命をすくひやはせぬ」と、最後まで姫に対

して恋々たる叫びを發しつつ絶え入ってしまったのである。因みに民俗学者の中に、これを従来の説話にみる所謂「末子成功型」とする説もあるが、別に成功したわけではなからう。

本稿はつぎにいよいよ竹取の翁、帝、かぐや姫の「性格論」に入らねばならないが、この三人の登場人物は、すでに述べた五人の貴公子のカラクテーレスとはまったく次元を異にするようである。わが娘に対する愛情とエゴイズムをむきだしにする世の常の父親、帝という王権のからんだ地上の至尊と、男の「性」の想像力によって仮作された天上の「聖女」との恋：これらが『竹取物語』の終局をそれまでとはまったくちがった王朝美学風の「性格論」にしている。したがってこの三人こそが、ある意味で、『竹取物語』の登場人物の核心部を構成するといえる。そのことについては次稿にゆだねてひとまずここで擱筆したい。

- 注1 拙稿『竹取物語』主題考(「明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科」平成六年三月)・『竹取物語』主題考補遺—比較文学における「素材・典拠」の問題をめぐって—(「同」紀要)平成七年三月)
- 注2 源為憲撰『三宝絵詞』上(現代思潮社・一九八二・一)三七頁。
- 注3 江口孝夫校注『三寶絵詞』上(現代思潮社・一九八二・一)三七頁。
- 注4 この問題については日・英対照言語論の立場から将来、私見を述べつもりである。
- 注5 引用はJ・C・ホーン『和英語林集成』(講談社学術文庫47版・昭・五五)のローマ字を私意に仮名・漢字化した。なお、本稿中の「引用文」は原文のまま。以下同じ。
- 注6 怨郷証明、飛田良文篇(東京堂出版・昭六二)による。なお、『国語教育研究大辞典—国語教育研究所編—』(明治図書出版・一九九七・七)の「性格」の項(橋浦兵一執筆)も参照。
- 注7 原文は A personality invested with distinctive attributes and qualities by a novelist or dramatist; also the personality or part assumed by an actor on the stage. 例として、1749 FIELDING, *Tom Jones*, 1756-82 J. WARTON. The comic character of Sir Tristram, 1875

JOWETT Plato, 1882. A. W. WARD. *Dickens* を引く。

- 注7 『文学論』序(岩波版『漱石全集』昭和三三・六一七頁)
- 注8 原題 THEOPHRASTOS *Characters* 引用文は藤井義夫訳『性格論』(「世界人生論集I」筑摩書房、昭和三八・三三)他に岩波文庫版に「人さまざま」がある。
- 注9 注8藤井氏解説文による。
- 注10 注8に同じ。
- 注11 注8に同じ。
- 注12 Gillian Beer, *The Romance*, Methuen & Co. Ltd. 1970. p.1.
- 注13 「変化の者にて侍りけむ身とも知らず親とこそ思ひたてまつれ」、「よくもあらぬかたちを、深き心もしらであだ心つきなば、後くやし事もあるべき」、「五人の人のなかにゆかしき物たまへらむに御志まなりたりとてつかうまつらむ云々」と、翁を親とみてはいるが、五人の男たちにはいかにも氷のように冷たい。
- 注14 岡 一男『竹取物語評釈』(東京堂、昭和三三・一一)一一六—一七頁。
- 注15 武田祐吉『竹取物語新解』(明治書院、昭和二八・五・九版)七五頁。
- 注16 三谷栄一『竹取物語評解』(有精堂、昭和三五・一一・十二版)一六一頁。
- 注17 拙稿『竹取物語の時間的構成』(「平安朝文学研究」七、昭和三七・一一)
- 注18 注14同書、一一二頁。
- 注19 塚原鉄男『竹取物語別記』参看。
- 注20 "The Ancestor of All Romance" in *Classical Japanese prose—An Anthology—* by H. C. McCulloch, Stanford Univ. Press, 1990. p.29. なお『竹取物語』英訳の初出は *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1887. January.
- 注21 注16同書、「宝漢瑠璃、宝嵌瑠璃、宝冠瑠璃の字を想定する。漢語で天の川を漢または銀河ともいうから。また宝漢を姓、瑠璃を名とした洒落かともされる。一七七頁。
- 注22 注20の書。
- 注23 五十嵐力『平安朝文学史』上巻(東京堂、昭和三五・五)一九三頁。
- 注24 注14に同じ。一七〇頁。
- 注25 注14に同じ。一八〇頁。
- 注26 大伴一族として威をふるった伴善男の「性格」を『三代実録』は「性忽醜、有二口辯、當官幹理、察斷機敏、政務變通、…中略…但心不寛雅、出言外剝、彈斥人短、無所畏避」(卷十三卷貞観八年九月条)本文は朝日新聞社版、昭和十五・十二。
- 注27 注16に同じ。一三四頁。
- 注28 注15に同じ。一三三頁。
- 注29 注16日本同じ。一三四頁。